九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

郁達夫と近代日本について

李，麗君
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494508

出版情報：比較社会文化研究. 10, pp.47-53, 2001-10-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第10号（2001）47～53頁
Social and Cultural Studies
No.10（2001），pp.47～53

郁達夫と近代日本について

李　　麗　君

はじめに

小稿は，郁達夫と近代日本の基本的な関わり，即ち彼の日本留学，近代日本文壇や文学者への接触，近代日本認識，そして日本文学受容にとっての不可欠の条件――日本語能力などについて，総合的に考察しようとするものである。

これらの問題に関して，これまでの先行研究は概ね郁達夫自らの語りのみに頼って，問題を扱っている。しかし，小稿では，それを問題解決の重要な手掛かりとする一方，さらにその周辺に存在した関係資料を調べあげ，先行研究の不足を補う意味も込めて，郁達夫の近代日本における人生・文学の軌跡を実証的に辿ろうと考える。

一　九年間にわたった日本留学

郁達夫は神田正則学校～東京第一高等学校特設予科～名古屋第八高等学校～東京帝国大学という経路を辿り，九年間の日本留学生活を送った。即ち，彼の人生と文学は名実ともに近代日本と深い関係を有したのである。ここでは，まず九年間の日本留学中におけるいくつかの問題について考察していきたい。

1913（大正２）年，17歳の郁達夫は，司法制度視察のために派遣された長兄夫婦と共に来日し，留学生活を始めた。同年11月，東京神田正則学校に入学。中国で正規な中学校教育を終えていなかったため，昼は中学校の正課を補習し，夜は日本語を勉強する毎日であった。数ヶ月の猛勉強の結果，半年後の1914（大正３）年７月，東京第一高等学校特設予科に合格した。

当時の一高及び一高特設予科について，『第一高等学校六十年史』は次のように述べている。

> 文部省令第十九号を以て，清国人を入学せしむる公私立学校に関する規程定められたり。當時民間に於ける清国留学生教育の施設としては，弘（宏）文学院，東京同文書院を初めとし，成城学校，京北中学校，大成中学校，正則英語学校，同予備学校，研数学館，明治大学経緯学堂等あり。明治年間に本校に入学せし留学生の多くは，先ずこれらの学校に於て日本語其他の普通学科を履修し，修了の後本校に入学を志願せり。[1]
>
> 本校はその創立の當初より本邦人の子弟をその本科に収容教育し来りしが，尚ほ別に支那留学生の為めに，明治四十一年四月特設予科を設け，試験の上之を収容し一ケ年（最初は一ケ年半）の予備教育を施し，修了の後は本校及び他の高等学校に配当し，進んで帝国大学に進入するの途を開きたり。[2]

この条例は大正年間にも変化せず，これによって当時の中国人留学生の一般的な進学ルートが分かる。つまり，郁達夫も正規のルートをたどり，神田正則学校を出てから，一高予科に入ったのである。

ちなみに，当時，中国人留学生の高等学校入学の競争はかなり厳しいものであった。

> 清国人にして我ガ国に留学し来る者驚くべき多数に上りしが……即ち明治40年には，高等専門の学校を志望する者激増し，就中，官立の高等学校以上の学校を志願する者二千人を突破せり。乃ちこれがために，此の年，時の清国公使李家駒は我が文部省に交渉し，文部省直轄の五校（最初は十一校）に清国留学生を入学せしむる協定を結べり，其の要領即ち左の如し。明治四十一年以降，十五年間，毎年，第一高等学校ニ六十五名，東京高等師範学校ニ二十五名，東京高等工業学校ニ四十名，山口高等商業学校ニ二十五名，千葉医学専門学校ニ十名，合計百六十五名ノ清国留学生ノ入学ヲ許可ス。清国ハソノ為メ学生一名ニ対シ二百園乃至二百五十えんノ割合ニテ，（公使館ノ手ヲ経テ）當該学校ニソノ教育費ヲ納ム。[3]

即ち，多くの中国人留学生にとって，一高に入学するためには競争の関門を通らなければならなかったのである。そのため，受験準備の半年間，郁達夫は非常に緊張した生活を続け，毎朝五時に起きては，近くの公園の芝生で日本語を暗誦し，昼は学校で正課を補習し，夜は学校で日本語の勉強をするのであった。さらに試験前の二三ヶ月はよく徹夜をし，結局，肺病にかかってしまった。努力の「報酬」として，郁達夫は順調に一高に合格した。最初，郁達夫は文科第一部に入学したが，後に長兄の意見にしたがって，医科第三部に転じた。

1915（大正４）年夏，郁達夫は一高予科を終了し，名古

屋第八高等学校に入学した。なぜ東京を離れ，八高に入ったのだろうか。上述の『第一高等学校六十年史』を見ると，

明治四十二年六月十九日，此の年以後，支那留学生にして本校特設予科を修了せる者は，本人の希望と学校設備の都合と参酌の上，之を本校及び他の高等学校に分配し，本科第一学年に入学せしむることゝせられたり。これによって本邦人と共学して帝国大学に進入するの途が開かれ，此の制は昭和七年特設予科廃止に至る迄引続き行はれたり。[4]

これによれば，郁達夫が名古屋の第八高等学校に入ったのはおそらく「本人の希望」でなく，学校当局から分配されたことなのであろう。

1916（大正５）年，八高時代の二年目，郁達夫は医科から文科に移った。そのため，彼の高等学校在学期間は三年から四年に延び，ずっと医科を勧めていた長兄との間にも不和が生じた。このことから，郁達夫の文学への熱意が分かる。

1919（大正８）年10月，郁達夫は高等学校を卒業，東京帝国大学法科大学から独立したばかりの経済学部経済学科に入学した。名古屋を出て東京に戻ったことはやはり郁達夫本人の選択でなく，文部省の規則によるものであった。

大正二年（1913年）十一月十八日，東京帝国大学評議会は総長を通じて諮問された下記の案件について審議している。……　六．高等学校中第一，第四，第八ノ三校を以テ専ラ東京帝国大学ニ入学セントスル者ヲ収容スル学校トシ，第三第六ノ二校を以テ専ラ京都帝国大学ニ入学セントスル者ヲ収容スル学校トシ，第二高等学校ハ之ヲ東北大学附属予科トシ，九州ニ在ル高等学校ハ之ヲ九州帝国大学附属予科トスルコト。[5]

また，郁達夫の東京帝大での修学期間が四年間ではなく三年間であったことにも説明を加えなければならない。『東京大学百年史』によると，明治20年代から，帝国大学卒業に要する年限の短縮問題も提出され，大正に入り，まず「大正八（1919）年四月一日，分科大学制度の廃止を含む帝国大学令の改正が施行されたのを機に，旧法科大学の経済，商業両学科は，勅令一三号により，経済学部として独立した」[6]。また，「東京帝国大学経済学部学科課程制定，大正八年三月三十一日，第二条　経済学部ニ於ケル修学期間ハ之ヲ三学年トス」[7]と決められた。つまりちょうど郁達夫が東京帝大に入学した1919（大正８）年から，経済学部の修学年数は三年間に変わり，1951（昭和26）年まで続いたのち，1952（昭和27）年から四年制に戻ったのである。

また，当時郁達夫はどのように東京帝大に入ったかについて，大正８（1919）年５月６日制定の「東京帝国大学経済学部入学及転科仮規則及び試験細則」によれば，「高等学校ヲ卒業シタル入学志望者ノ数本学部収容予定人員ニ超過スル場合ニ於テ選抜試験ヲ行ヒ入学者ヲ定ム，選抜試験ヲ行フトキハ予メ之を各高等学校ニ通知ス」[8]ということであった。しかし，大正８年，郁達夫が入学した時点で，経済学部は「独立はしたが，法科大学にくらべて，経済学部は世に知られていない。そこで，学生募集のために，教官は手分けをして各高等学校を訪問し，経済学部の内容を紹介し，受験の勧誘に努めた」[9]という。つまり，郁達夫が経済学部に入学した時，入学志望者の数は収容予定人員より少なかったので，郁達夫を含むこの年に入学した学生は全部無試験で入学したことが分かるのである。

郁達夫，1919年10月東京帝大に入学してから，1922年３月に卒業，同年７月20日に，九年間の日本留学生活に終止符を打ち，帰国した。その時，彼は26歳であった。

17歳から26歳まで，郁達夫はその青春時代の九年間をすべて日本で過ごした。これだけを見ても，彼の人生の中で，日本がたいへん大きな存在だということが分かるだろう。

二　郁達夫と近代日本文壇及び文学者

郁達夫は小さい頃から古典教育を受け，後年に書かれた詩の中に「九歳題詩驚四座」（九歳の時，詩を書いて人々を驚かした）という回想があるように，日本に来るまでに多くの古体詩を書き，評判も博していた。しかし，近代的な文学という意味で，本格的に文学の道を歩み始めたのは，日本に来てからのことである。

後に有名な文学者になった郭沫若は，郁達夫の一高予科時代の同級生であるが，当時の郁達夫の文学的教養について，こう語っている。

達夫はとても聡明で，英文，独文をともに得意とし，中国文学の教養も豊かであった。一高予科時代，彼はすでに旧詩作りの名手で，我々は彼を才子だと感じていた。彼は欧米の文学が好きで，友人の中では，彼が最も小説に耽溺していた。[10]

彼自らも，「高等学校在学四年間に読んだ露，英，独，日，仏の小説は全部で一千冊に及び，後に東京の帝大に入ってからもこの小説を読む癖は少しも改まらなかった」[11]という証言を残しており，当時の文学に対する熱中ぶりが伺える。

ヨーロッパ及び日本の小説を読む以外に，八高時代から，郁達夫は日本の文学者と付き合い始めた。八高に在学していた時，郁達夫は自分の得意な漢詩を数多く作り，『新愛知新聞』（『中日新聞』の前身）及び『八高・校友会雑誌』，『太陽』，『雅声』などの雑誌に発表した。彼の詩は漢詩人の服部担風に注目され，そして高く評価された。1916（大正５）年５月，郁達夫は服部担風を訪問し，そのときから，年齢を超えた交流が始まった。これについては，稲葉昭二が『郁

達夫・その青春と詩』（東方書店，1982・4）の中で詳しく記している。それによれば，郁達夫の漢詩の修養と日本語能力は服部担風を驚かさせた。同年6月26日，郁達夫の漢詩「日本謡」がその日の『新愛知新聞』に掲載され，それを読んだ服部担風が，「郁達夫君吾が邦に留学して未だ一二年を出でず，しかし此の方の文物事情はほとんど精通せざるなし，自ら才識軼群にあらざれば，断断として能わず。日本謡の諸作は奇想妙喩，手に信せて捻出す。絶えて矮人観場の憾なく，うたた長爪爬癢の快あり。一唱三嘆，舌あがり下らず」[12]と，絶賛している。二人の付き合いは服部担風の弟子にも感銘を与え，二人の関係は，「師弟と称するよりも，異邦の年少の詩人に，敬愛の心をもって交わるぐらいの気持であったようだ」[13]と，弟子は感嘆している。稲葉昭二も「魯迅における藤野先生が，郁達夫にとっては，服部担風であったと言っても過言ではあるまい」[14]と語っている。郁達夫自らも「あの時兄が帰国して，私は日本で一人孤独だった。担風先生との出会いは，私にとってなんと温かいことだったであろう。彼はまるで私の先生と父兄のようで，いつも私に自信と力を下さった」[15]と語っている。

郁達夫は日本留学時代に数多くの漢詩を詠み，さらに小説も書き始め，しかも一躍有名な作家になった。1915年から1919年にかけて白話小説「金絲雀」，「相思樹」，「雨夜巣」等が試作されたが，原稿は散逸してしまった。留学時代に発表された小説は以下の通りである。

「銀灰色的死」（『沈淪』創作集，1921年10月）

「沈淪」（『沈淪』創作集，1921年10月）

「南遷」（『沈淪』創作集，1921年10月）

「友情和胃病」（『平民』第74，75，76，77期，1921年。1927年10月「鶏肋集」収録時に「胃病」と改題。）

「茫茫夜」（『創造季刊』創刊号，1922年3月）

「風鈴」（1922年7月改作。『創造季刊』第1巻第2期，1922年8月。1935年9月『達夫短篇小説集』収録時に「空虚」と改題。）

「秋柳」（1922年7月初稿，1924年10月改作。『晨報副鐫』1924年12月14，16――24日）

東京帝国大学に入ってから，郁達夫は本格的に文学活動を始め，1920年，郭沫若，張資平などの日本留学生と一緒に文学団体「創造社」を形成した。まもなく佐藤春夫と知り合った。以来，たびたび佐藤春夫邸を訪問して，ついに春夫に傾倒するようになった。「日本の現代小説家の中で，私が最も崇拝しているのは佐藤春夫である……私はいつも彼の境地にまで達したいと思うのだが結局＜虎を描いて成らず＞である」[16]という。以降，郁達夫が佐藤春夫の文学から影響を受けたことは確実であり，二人の人間的・文学的な関係も常に研究者に注目されている。[17]

日本から帰国した後，郁達夫は中国文壇の有名作家として，個人の文学活動を続けながら，日本文学者たちともかなり親しい関係を保っていた。尊敬する佐藤春夫のほか，村松梢風，小田嶽夫，井伏鱒二，金子光晴等と様々な付き合いがあった。また，1927年からは，日本のプロレタリア作家との往来もあった。1927年4月，日本文芸戦線社の里村欣三，小牧近江が創造社を訪問し，郁達夫と中国のプロレタリア文学について話しあい，同月郁達夫は「日本の同志に訴ふ」という声明文を書き，自ら日本語に翻訳して，1927年の日本「文芸戦線」第6巻第6号に掲載した。1933年3月，小林多喜二の無残な死のため，「為小林的被害檄日本警視庁」（『現代』第3巻第1期）という文章を書いて，日本プロレタリア文学への関心を示している。

郁達夫は生涯にわたって，様々な形で日本及び日本の文学に関わり，日本に対して好感を抱いていた。一方，彼を知った日本人も彼にかなりの親近感を持ったようである。

八高時代の郁達夫と付き合いがあった冨長蝶如は，当時の郁達夫について，「平生は極めてまじめて静かな人物であったが，それがまた酒を飲み出して杯を重ねても，酔ってくずれることもなく，少し話に興が乗るぐらいで，やはり静かにちびりちびりと杯をあげて，低い声で話をする―その声の余音は，今も私の耳の中に残っている」[18]と回想し，好感をもらしている。

詩人金子光晴は郁達夫の親しみやすさがとりわけ印象深かったようである。

> 郁達夫さんとは，上海の内山書店にいった時，ご主人の完造さんに紹介されて知り合った。印象はまるで中国人らしくなく，むしろ日本人に近いという感じだった。東京で彼と一緒に歩いても，誰も彼を中国人だと見破る人はいないだろう。鼻っ柱は強いがつつかれると弱いといったところなど大変日本的だ。性格は，話していて抵抗感がなくて親しみ易く，一見してすぐその人が解るという感じの人だった。[19]

> 僕が郁さんについて中国人を研究しやうと試みたらそれは失敗たったらう。それほど郁さんは日本人と通ひあってゐた。[20]

人間性のほか，郁達夫の小説も日本人からの評判がよく，例えば中国文学研究者岡崎俊夫は次のような感想を語っている。

> この時（大学時代―筆者）から，いろんな作家のものを読んで見たが，郁達夫を除いては心からいいなあと思ったものはない。ほかの小説はあの疊石のやうに連なつた四角い文字がヅキヅキ目を刺していとも味気ないが，郁達夫を読むと文章のやさしいせゐもあるだらうが，四角文字も丸く見え，字と字の間から香りのいい煙が立昇やうな感じがする。張天翼や沈従文も好きな作家だがやはり何だが物足りないところがある。[21]

三　郁達夫の近代日本認識

近代中国文学者の中で，郁達夫ほど日本に関する言説を数多く残した作家は多くない。彼は，日本における中国人留学生の悲哀・悲憤を描写する『沈淪』のような小説を書いているが，一方，彼の日本観を見ると，ほとんどが好意的に近代日本をとらえ，日本人の国民性，日本の伝統・文化及び日本の近代以来の発展進歩を高く評価し，感心を示したものである。

郁達夫は国民性の視点から，明治以来の日本の飛躍を賛嘆し，日本人の国民性が社会進歩に大きな役割を果たしたと，大いに敬意を表し，30年代の「日本の文化生活」(『宇宙風』第25期，1936年９月）という文章の中では，次のように賞賛している。

明治維新が行われてから今日までわずか七，八十年しか経っていないにもかかわらず，日本の進歩は，千年余りの文化を持っている英，仏，独と肩を並べることができるようになってきた。

また郁達夫は「雪夜―自伝之一章」(『宇宙風』第11期，1936年２月16日）の中で「私がそこに留学していた時は，明治の一代がすでにその維新の事業を完成し，老樹の上に若い枝が接木され，旧い革袋に新しい酒がもられ，その渾然たる圓熟ぶりにはほとんど破綻が見出されなかった。新興国家の気象は元来雄大なものであり，新興国民の態度は元来濶達なものである」，中国と比べれば「根底は深くないが，枝葉はすごぶる繁茂している。発明発見などの創始は絶無であるが，進歩は非常に速い」(岡崎俊夫訳）と述べていた。郁達夫は日本の「固有の，あの生を軽んじ国を愛する，苦労に耐える辛抱強い国民性」を成功の「中心の支柱」と思っていた。

郁達夫の理解では，「生を軽んじ国を愛する」という点を，よくいわれる「武士道」精神というマイナス的な意味を含む概念でなく，むしろ民族のため国のため，自分の命を捧げるという勇敢で愛国の精神そのものという風にとらえていた。「苦労に耐える辛抱強い」国民性という特性についても，その内的力を強く感じたようで，彼は，「刻苦向上するのは，もともと日本の一般国民の生活傾向」，「しかも日本の一般国民の生活はこのように刻苦しているので，みんな元気の方向に向かって行っている」と考えていた。郁達夫はここに近代日本の発展と中国の腐敗・衰退の原因を見出し，「憂患の中で生き，安楽の中滅亡するのは，日中両国の盛衰の源だ」と，痛切な結論を出しており，日本人の国民性がその進歩発展の原動力であると，真正面から捉えている。

日本文化についての理解も郁達夫の近代日本認識の重要な部分である。基本的に言えば，郁達夫は日本の文化に対して強い共感や親近感を持っていると言って良い。後年，彼は渡日途中の見聞を回想して，次のように語っている。

日本芸術の淡白多趣，日本民族の刻苦忍耐は，この沿途の風景，あるいは海中の島々の果樹園や開墾地を見てもほぼ察しがつく。蓬萊の仙島とはこのあたりを指すのかどうかは知らないが，何びとも中国から日本に行き，ひとたび瀬戸内海を過ぎ両岸の山光水色と漁家農村を見たならば，たとい秦の徐福ならずとも，必ずや神仙の棲処であるという幻想を起こさずにはいられないのである。[22]

彼は日本の自然風景から日本人の日常生活にまで，日本・日本人の独特な「気質」を発見し，日本の文化生活の美学的「神髄」を次のような表現に凝縮している。即ち「淡泊から奇妙な趣が生まれ，簡潔さから深意が生じる」(「日本の文化生活」）ということである。大正時代，国文学家芳賀矢一が『国民性十論』を書き，日本人の国民性を十点にまとめているが，「淡泊の趣」についていうならば，むしろ郁達夫の理解の方がより興味深いのではないかと思われる。

また，最も郁達夫を引きつけたのは，やはり日本文化の中に見出した中国文化の「遺風」であり，その中国ですでに失なわれたものが，彼に大きな喜びを与えている。日本の楽器を見ると，「昔中国で〈南風之薫矣〉を歌った上古時代を思い出すことができ」，茶道を見ると，「進退は節度があり，出入りは礼儀よく，みんなが楽しんでいる様子は唐宋以前の太平盛世の民風を思い出させる」。日本の伝統行事を観察すると，「元日の門松，端午の鯉昇り，七夕の星祈り，中元の盆踊り，及び重陽の栗のお菓子等など」，みな「中国の年中行事」を思わせるもので，彼は感嘆を禁じ得なかった。この自分の民族の伝統文化が染み込んだ日本文化に対しての感激や共鳴が東京帝大在学中に書かれた詩の中にはよくあらわれている。

秋夜河澄浄夜庵，蘭盆佳話古今談。
誰知域外蓬壺島，亦有流風似漢南。

桑間陌上月無痕，人影衣香午断魂。
絶是江南風景地，黄昏細雨賽蘭盆。

当然のことながら，弱小な国からの留学生として，郁達夫も屈辱を受け，民族的な悲哀を強く感じることもあって，日本に対して，批判もしている。しかし，彼の日本観を見ると，近代日本の進歩と発展を高く評価し，日本文化に独特な個性に親近感を覚え，日本人の国民性における優れた面を賞賛している。これは，彼の日本観の基本的傾向であり，同時代の日本留学経験のある文人たちに共通する特徴でもあると言って良い。魯迅には，郁達夫の「日本の文化生活」のようなまとまった「日本論」がないが，多くの場合で，日本人の「まじめさ」，日本人の外国文化摂取の積極

性などに触れ，日本のこうした良さを学ぶべきだと語っている[23]。一方，周作人は自分の日本留学生活について興味深く記しており，特に日本の庶民生活における面白さに感心を示している[24]。また，郭沫若も日本の明治維新以来の飛躍を高く評価し，それを日本人の国民性と結びつけて考えている[25]。彼らと比べると，郁達夫は日本の社会・国民性から日本の文化・生活まで幅広く論じて，そして分かりやすい表現でそれを提示している点が非常に特徴的であると言える。

しかし，日中戦争を転換点として，郁達夫の一貫した日本観も変わってしまった。彼はこれまでのように平静に日本のことを語る余裕がなくなった。彼は祖国の存亡の危機を憂慮し，日本の中国侵略の暴行に抗議し，日本の野蛮な軍国主義を激しく非難する文章を次々と書き出した。これはまさに金子光晴のいうように，「日本の軍の暴力が，郁さんをめちゃめちゃにしたことで，郁さんは，日本を憎悪したらう。日本というものを一色に染めて憎悪したらう」[26]ということである。彼自身はかつて日本を深く愛していたが，結局日本に命を奪われてしまった。これはまさにこの時代の大きな悲劇であろう。

四　郁達夫の日本語

具体的に郁達夫と日本近代文学の関係を考える際，彼の日本語能力がどの程度のものであるかということは重要である。それは，彼の日本文学受容「力」に直結しているためであり，以下，彼の日本語力問題を実証的に考察してみたい。一言で言えば，郁達夫は優れた外国語能力を有していた。日本に留学する前，長い間キリスト教学校に在学し，かなり高い英語力を身につけ，日本に来てからも日本語の他，ドイツ語も習得し，ドイツ語文学をスムーズに読めるようになったようである。それでは彼の日本語能力はどの程度のものだったのだろうか。

郁達夫は幼い頃から聡明で，９歳の時，すでに洗練した古体詩を書けるようになっていた。中学校時代までには，相当程度の英語力が養われていたという。日本語の習得はもちろん日本に来てからのものであった。

来日後，郁達夫はただちに東京神田正則学校に入学，一高予科受験のための学習を始めた。関係資料によれば，当時中国人留学生の入学試験科目は三つで，即ち日本語・数学・英語である。[27]郁達夫自らの回想によると，その時，毎朝五時に起きて，日本語を朗読・暗記して，昼間は普通科で，夜になると，学校での三時間の日本語学習に通う。「この半年間の猛勉学は，私の体に致命的な病気の種を播いてくれたが，得た智識は中国にいた十数年間で受けた教育よりはるかに多い」（「海上―自伝之八」）と，その猛勉強振りを自慢している。こうして，郁達夫は順調に一高予科入学の関門を突破したと同時に，基本的な日本語力も身につけたのである。

一高予科に入ってからも，日本語学習はかなりの時間を占めている。その頃の中国人留学生時間割表を見ると，週六日の授業の中で，日本語が六時間，英語が四時間，ドイツ語が三時間であった。[28]

1915（大正４）年７月，郁達夫は一高予科から名古屋第八高等学校に入学した。『第八高等学校一覧　第九年度　自大正五年至大正六年』の時間割を調べると，在学四年間，郁達夫の学んだ語学科目の時間数は次のようである。一年目は日本語が三時間，英語が三時間，ドイツ語が十三時間，二年目は日本語六時間，英語，ドイツ語，フランス語がそれぞれ九時間，三年目は日本語が五時間，英語，ドイツ語，フランス語がまた九時間で，四年目は日本語が四時間，英語，ドイツ語，フランス語がいずれも八時間ということであった。

要するに，補習学校から高等学校卒業の五年半，学校の重要な科目の一つとして，郁達夫はかなりのペースで日本語の習得を続けていた。これだけを見ても，彼の日本語は相当のレベルに達していたと思われる。

実際にも，郁達夫を知った日本人の回想，証言の中で，郁達夫の日本語力に触れたものが数多い。日本人研究者稲葉昭二の調査によれば，少なくとも1916年，即ち名古屋八高在学時代の郁達夫は，すでにほとんど自在に日本語を操ることができた。郁達夫が漢詩人服部担風と初対面の時，服部は郁達夫の流暢な日本語，『源氏物語』に関する知識に驚かされたという。担風の弟子冨長蝶如が『服部担風雑記』の中で，師服部と郁達夫の交流を記しており，郁達夫の日本語にも触れている。

> 私は達夫に手紙を出した。するとすぐ返事が来た。いずれも日本文で，自由に意思の交渉ができたし，殊に彼は暢達に，自在に日本文を書いてよこした。[29]

> 郁達夫は語学の天才でもあったようだ。英，独の語をよくしたが，それを学ぶのに，彼の言を借りれば，＜それは何の苦労もなく＞熟達したらしい。その点は，彼は日本語も，極めて自由自在に操った。多少アクセントと，発音の違いはあったが，まず正確な日本語をしゃべったし，日本の文学書は，何の渋滞もなくすらすらと読んだ。彼は＜源氏物語を読んでいる＞と言って，担風先生の度胆を抜いたらしいが，これは事実だ。[30]

東洋史学者石田幹之助も，郁達夫が東大に在学時，二人が正門前の喫茶店で会ったことを書いており，「何を話したかは，余りにも昔の事で憶えていませんが，大変流暢な日本語を話していたことだけは憶えています」[31]と語っている。

佐藤春夫の姪佐藤智恵子は1927年の日記の中で，上海に旅行した時，郁達夫から中国料理をご馳走になったことを書いており，郁達夫は「日本語が上手で少しも不便を感じない」[32] と証言している。

増井経夫の回想によると，1935年12月，杭州へ郁達夫を訪問した時，郁達夫は「＜貰う物なら夏でも小袖＞と冗談を言うなど，日本語に堪能なところを見せ，それがいかにも嬉しそうだった。彼はわざと江戸弁をまねた巻き舌を使うなど，それは上手だった」[33] と語っている。

中国文学者の増田渉も，「郁氏の日本語は非常に上手でした。『大魯迅全集』の宣伝パンフレットにも推薦文を書いてもらったのですが，平仮名まじりの文章で，ちょっと驚いた記憶があります。日本文の書ける中国人でも，たとえば魯迅などでも，その日本文は片仮名交じりで，平仮名を書くのは余程日本で生活し，日本文に慣れた人でないとできないと，私はかねて思っていたからです」[34] と，郁達夫の日本語の上達ぶりを述べている。

郁達夫は自分の日本語力を駆使して，日本語で作品を書いたり，日本語作品を中国語に翻訳したりすることもあって，次のようなかなりの業績を残している。

日本語で書かれた作品や書簡

「塩原十日記」，日本『雅声』第３，４，５集，1921年

「日本の同志に訴ふ」，日本『文芸戦線』第４巻第６号，1927年

佐藤智恵子宛（1928年１月13日），『郁達夫資料補篇（下）』

佐藤春夫宛（1928年３月９日），前掲書

井伏鱒二宛（1936年９月28日），同上

「今日の中華文化」（上，下），『読売新聞』，1936年11月29日，12月１日

「支那の現状に就いて」，日本『霞山会館講演』第39集，1936年12月

「支那文学の変遷」，台湾『日日新聞』，1937年１月14，15，16日

「日本の朝野より支那を見直せ」，『大阪毎日新聞』，1937年１月４日

「魯迅の偉大」，日本『改造』第19巻第３号，1937年３月

中国語に翻訳した日本の作品：

出家与自殺（細田源吉），『新生学』創刊号，1931年１月

自己短評（葉山嘉樹），同上

徒然草〈選訳〉（兼好法師），『宇宙風』第10期，1936年２月１日

こうした点を考慮すると，郁達夫は確実にして十分な日本語力を有しており，様々な面で直接的に日本文学を受容する条件を十分に有していたといえるのである。

おわりに

以上の考察を通じて見られるように，郁達夫は魯迅，周作人，郭沫若などと同じく，近代中国の文学者の中でも，とりわけ近代日本の社会，思想文化，文学と深い関わりを有していた作家であった。彼は若くして17歳から日本に渡り，日本の教育を受け，日本的な生活をすると同時に，総合的に日本の社会・文化・文学・風俗など，様々な面から影響を受けた。その上で，彼は文学活動を始め，日本の文学を読み，日本の文人と付き合い，突然「私小説」的な作品を世に送り出した。以後の作品は，一般の中国作家とは違った「異色」を帯びるものとされている。このように見てくるならば，郁達夫の人生，文学を理解するに際しては，まず彼と日本の深い「因縁」を読みとかなければならないと言えよう。

【注】

1　『第一高等学校六十年史』（昭和14年３月）498頁。
2　前掲『第一高等学校六十年史』470頁。
3　前掲『第一高等学校六十年史』499～500頁。
4　前掲『第一高等学校六十年史』508頁。
5　『東京帝国大学百年史』通史二（東京大学出版社，昭和60年３月）18頁。
6　『東京帝国大学百年史』部局史一（東京大学出版社，昭和61年３月）924頁。
7　『東京帝国大学百年史』資料二（東京大学出版社，昭和60年３月）809頁。
8　前掲『東京帝国大学百年史』資料二，819頁。
9　前掲『東京帝国大学百年史』部局史，928頁。
10　郭沫若「論郁達夫」（『人物雑誌』，1946年９月第３期）。
11　郁達夫「五六年来創作生活的回顧」，『達夫全集・第３巻』＝『過去集』，上海開明書店，1927年11月。引用は『郁達夫文集』（第７巻178頁）による。
12　稲葉昭二『郁達夫・その青春と詩』（東方書店，1982年４月）102頁。
13　稲葉昭二，前掲書，155頁。
14　稲葉昭二，前掲書，123頁。
15　郁峻峰「郁達夫与服部担風」（『新文学史料』1998年第３期）。
16　郁達夫「海上通信」，『創造週報』第24号，1923年10月20日。引用は『郁達夫文集』（第３巻73頁）による。
17　この問題については，中国の研究者だけでなく，日本およびヨーロッパの研究者からも優れた研究がなされている。座談会「佐藤春夫と中国」（『近代文学における中国と日本』，汲古書院，昭和61年10月）及びオランダの KuRt W.Radtke「混乱，還是一致」（『中国現代文学研究叢刊』1994年第２期）を参考されたい。
18　稲葉昭二，前掲書，182頁。
19　昭和47年11月19日金子光晴談（『郁達夫資料補篇』下，東京東洋文化研究所附属東洋学文献センター，昭和49年７月）。
20　金子光晴「郁さんのこと」（『新日本文学』1950年６月号）。
21　岡崎俊夫「楽焼の郁達夫」（『中国文学月報』第１巻第４号昭和46年３月）。
22　郁達夫「海上―自伝之八」，『人世間』第31期，1935年７月５

日。日本語訳は岡崎俊夫訳による。

23 内山完造『魯迅の思い出』(社会思想社，1979年９月)，魯迅「今春の感想二つ――十一月二十二日，北京輔仁大学での講演」，「『象牙の塔を出て』後記」など参照。

24 周作人『魯迅の故家』(筑摩書房，昭和30年３月)，『薬堂雑文』(新民印書館，1945年１月)，『周作人随筆集』(改造社，昭和13年６月）等の関連部分参照。

25 郭沫若『桜花書簡』，「復興民族的真諦」，「偉大的精神生活者王陽明」等参照。

26 金子光晴，前掲書。

27 『第一高等学校六十年史』によれば，一高予科創設の明治41年の中国人留学生受験日程表は以下の通りである。

４月10日	午前８:00～10:00	国語の書き取り，作文
	午前10:00から	国語の会話
４月11日	午前８:00～12:00	数学，算数，代数，幾何
	午後３:00～５:00	英語，日語英訳，英語日訳

28 前掲『第一高等学校六十年史』501頁。

29 稲葉昭二，前掲書，150頁。

30 稲葉昭二，前掲書，159頁。

31 前掲『郁達夫資料補篇』(石田幹之助，昭和47年10月20日談) 199頁。

32 前掲『郁達夫資料補篇』(佐藤智慧子氏日記，昭和２年７月) 201頁。

33 前掲『郁達夫資料補篇』(増井経夫，昭和47年10月26日談) 210頁。

34 前掲『郁達夫資料補篇』(増田渉の手紙，昭和47年11月30日) 208頁。